

ライター出身作家の描く図書館 北森鴻のケースについて

——図書館はどうみられてきたか・12——

佐藤 毅彦

How Kitamori Kou describes libraries in his novels?

——Images of the Library (12) ——

SATO Takehiko

Abstract : Based on the facts and his rich experience in research, Kitamori Kou kept on publishing his works. The libraries and librarians that Kitamori Kou so vivid describes in his work have a strong presence to some extent. Libraries work as an information provider, but the materials used in the libraries are usually abridged editions of newspapers and the likes, so there seems to be a limitation of the services provided by libraries. There is an urgent need for the variety of public roles libraries can play in the public sector to appeal continually to the society.

要約 : 豊富な調査体験をもとに、事実に裏付けられた作品を発表してきた北森鴻の作品に描かれている図書館や図書館員には、ある程度の存在感があり、情報提供機関として機能しているが、図書館で利用されている資料は、新聞の縮刷版などであり、図書館が提供しているサービス内容に限界も感じられる。図書館が担う公共性の多様さを社会的に認知させるための継続的なアピールが必要となっている。

1. はじめに

2011年8月26日(金)21:00~22:52に、フジテレビ系列で、森村誠一サスペンス「破婚の条件」が放映された¹⁾。ヒロインの女性が、突然、フリーライターをしている夫が嫌いになり、殺人計画を日記につづるようになる、という導入部のストーリーはドラマと原作で共通している。一方、ドラマでは、ヒロインは「図書館に勤めている」ことになっている²⁾が、森村誠一による原作では、「チャームプロデューサーという女性の美容全般にわたるコンサルタント」をしており、「以前は大手化粧品会社の美容部員」だったが、「三年前に退職して、美容部員時代の経験と人脈を生かして、フリーのチャームプロデューサーに転進し

た」(p.12)「女性が美しくなるためのあらゆる指導を行う」「口コミで次第に客が増え、最近ではCMや雑誌グラビアの仕事も入るようになってきた」(p.13)とされている³⁾。

ドラマの登場人物のせりふで語られるヒロインのキャラクターは、「里見昌枝 36歳。区立城東図書館で非常勤の司書をしています」(警察の捜査会議での捜査員の発言)、「子どものころから、ずっと本ばかり読んで、友だちとうまくつきあえなくて。自分はどこかみんなと違うって、思ってたの」(夫の死後に親密な関係になる、保険会社社員の中西にヒロインが語ったことば)⁴⁾、「父は高校の教師で、母も中学の教師」「両親は共稼ぎで、だからわたしは、ずっとほっとかかれてさみしかった」(同じく、ヒロインが中西に語ったことば)など、図書館に勤めている、子どものころから

本が好きだった女性, というものである。

夫と知り合うきっかけについては、「最初はあたしの勤めてる図書館に資料を借りに来たの。ジャーナリストなんて名刺もらって、それだけですごい人に、見えちゃって」(ヒロインが中西に語ったことば)というものであり、また、中西が最初に登場するシーンも、図書館で「ドストエフスキーはこれだけですか」「ここにないものは貸し出し中だと思います」「そうなんだ」「ご予約なさいますか?」といったやりとりからはじまっている。

ヒロインの勤め先としては、「練馬区立城東図書館」という架空の図書館名の看板が映しだされている⁵⁾。ドラマの冒頭の場面では、ヒロインと同じく図書館に勤務している女性ふたりが「だってショックですよ。正規職員っていうのは、みんなあんなにもらってるなんて」「いまさら、何いってんのよ。司書なんてきこえはいいけど、結局あたしたちはパートの職員じゃない」「だけど手取り10万じゃ、暮らしていけません」という会話をしており、待遇改善を求めて活動をはじめようとして、ヒロインにも声をかけるが、断られ「主婦は生活の心配がなくていいわね」と言っている。

撮影に当たったのコストなどの関係か、先に紹介した会話で話題になっていた「正規職員」や図書館を利用している人たちは画面に登場しない。ヒロインは、「図書館に勤務するパートの司書」であり、「手取り10万」程度の収入、という設定は、原作では、「チャームプロデューサー」としての仕事が順調で、夫がわずらわしく感じられるようになったのに対し⁶⁾、ドラマでは、夫がきらいになっても、展望の開けないヒロインの状況がより強調されており、そのために「図書館に勤務するパートの司書」という設定が選ばれているように思える⁷⁾。ドラマのストーリー制作の過程で、図書館に勤務している人物や「司書」資格を、制作者がどのように考えているのかが反映されているといえよう⁸⁾。

2. ライター出身作家：北森鴻

先のドラマでは、ヒロインの夫がフリーライターという設定であったが、そうした経歴を背景に、作家に転進しているケースが何人かみられる。北森鴻は、1961年、山口県生まれで、「駒澤大学文学部歴史学科卒業後」「1993年に創作活動を開始」し、「1995年に長篇『狂乱二十四孝』で「第六回鮎川哲也賞を受賞、本格的な作家デビューを果たした」後¹⁾、1998年『花

の下にて春死なむ』で「第52回日本推理作家協会賞・短編および連作短編集部門」を受賞、30点あまりの単行書を刊行してきたが、惜しくも、2010年1月25日逝去した²⁾。

作家活動に専念する以前は、「編集プロダクションに所属」し、「小学館の学年誌」「の仕事を中心にして、旺文社の学習雑誌、他社の単行本」や「某スポーツ紙の」「エッチ記事を週に何本も書き散らかして」て、「文章力のすべては、この編集プロダクション時代に培われたとって過言ではない」(p.41)と述べている。「鮎川哲也賞」受賞後、「受賞第一作で書いた九十枚ほどの短編が、翌年の日本推理作家協会賞短編集部門の候補に」なり「このときは受賞できなかったが」「候補作を表題とした『花の下にて春死なむ』によって」「推理作家協会賞を連作部門で」受賞(p.131)している³⁾。

この経歴と作品の関係について、医学の世界を扱った作品である『冥府(アヌビス)の産声』(文庫)の解説で、杉江松恋は、「医学ミステリー」といっても、北森は医学部出身者ではなく、「取材の力だけで」書いたもので、「職人作家の面目躍如」(p.391)「編集プロダクション時代の北森は硬軟さまざまの記事原稿を手がけたということであり、ユーモア短編から重厚なサスペンスまで、多彩な作風を書き分ける地肩の強さは、このライター時代に培ったものと見て間違いない」(p.392)としている⁴⁾。

また、杉江は、『暁英 贗説・鹿鳴館時代』「初刊本解説」でも、「北森鴻作品の第一印象は、非常に強い小説というもので」「背後に膨大な取材量があることをうかがわせるのだが、決してそれをひけらかさない」「取材という話でいえば、単に情報の量が多いだけでなく、着眼点も常に優れていた」「デビュー以前、編集プロダクションに所属して多くの記事を書きまくっていた(学習雑誌の原稿を書いた直後にスポーツ新聞のアダルト記事を書くようなこともたびたびあったと聞いている)。踏んだ場数が、取材の力として作品に表れていた」(pp.567-568)と述べている⁵⁾。

さらに、千街晶之は、北森鴻について「編集プロダクションに勤め、ライターとして筆力を磨いた」「彼は、言葉の最良の意味での職人肌作家であったと思う」「いかなる努力も惜しまない凝り性でありながら、その苦心を読者に窺わせず、完成度の高い作品だけをさりりと差し出すスタイリストであった」(pp.280-281)と表現している⁶⁾。

北森鴻自身も、作家としてのデビュー直後のインタ

ビューで、「ずっとライターをやってきて、小説を書くようになったのも三十過ぎてから」で、「時代考証と描写の緻密さ」や「資料調べ」について、鮎川哲也賞受賞作の『狂乱二十四孝』の執筆に際して、「松竹大谷図書館や、国立劇場のビデオライブラリーを利用しました。歌舞伎に関する資料ってかなり詳しく残っているんですね」(p.21)と語っている¹⁾。

こうした経歴をもつ北森鴻の作品の中では、自ら体験したことのあるライターを登場人物として設定し、その人物が図書館を使って調べ物をしている例がいくつもある。また、それ以外にも図書館や図書館員についての描写が、複数の作品に登場する

3. 北森鴻作品と図書館

3-1. 図書館を使って調べものをする人物が登場する作品

3-1-1 『冥府（アヌビス）の産声』¹⁾

医療ライターの相馬研一郎は、脳死について取材するため、かつて在籍していた、帝都大学医学部を訪れ、「図書館へと足を向けた。開架書架の閲覧室を抜け、非常階段を使って地下へと降りた」「上の図書館を利用する学生や研究者は大勢いるが、ここを訪れる人間はほとんどいない」「湿気のこもった閲覧カウンターには、相馬がいた頃からこの業務に就いている、白髪混じりの小男が座っている。いつも机の陰に隠れるように、なにか書き物をしているのだが、はたしてそれが業務上の必要事項なのか、確かめたことはない」(pp.116-117)という場面がある。遺体の管理台帳をみたいという、カウンターの男は、プライバシーの問題があるから、と、はじめはしぶっているが、それほど厳しく制限するほどのことでもないかと「『貸し出しはきかんよ』『わかっている。閲覧だけでいい』男が、あちらを使えというように、カウンターの隅にある長机を顎で示した」(p.119)という対応をしている。

後日、再び、相馬が「図書館の地下室に向かい、カウンターに顔を埋めて、なにか書き物をしている男の前に立った。相変わらず、利用者の姿はない。それを確認して、男に声をかけ」(p.134)もっと詳しく、過去の研究記録を調べようとするが、上からの命令で見せられないという。その後、相馬は、この男を、大学の裏門で待ち伏せ、地下鉄を降りて店に入ろうとするところで声をかけ、金をちらつかせた上で、「『医学および科学関係誌に「窓」という署名で裏情報を流して

いる男がいるそうだ。こいつの情報はまず矛先が鈍ったことがない。たぶん大学の関係者の匿名だといわれているんだが、この話にも興味がないか』男が沈黙した」(pp.236-240)といったように、脅迫まがいの発言をして、情報をひきだす。

3-1-2 『闇色のソプラノ』²⁾

(以下に示す「遠誉野（とよの）市」「樹来たか子」「彩京経済大学（現彩京大学）」は、いずれも架空の固有名詞である）

東京郊外の「遠誉野（とよの）市」は、ベッドタウンとして開発され、「彩京経済大学（現彩京大学）」が移転してきて、「学園都市としての一面をもつようにもなった」(p.12)という。この大学の図書館が、市民にも開放されており、そこを利用する登場人物同士の偶然の出会いの場となっている。学生、市民など、その大学図書館を利用している人物が複数登場する。

◎桂城真夜子

「文学部で国文学を専攻する学生」で、友人の家でみかけた同人誌に掲載された童謡詩に興味を持ち、詩人の「樹来たか子」を卒論のテーマに選ぶ (pp.42-44)。文献について、教授に相談すると「本になっているものはない。学会で発表されたもののレジュメか、専門研究誌の特集記事か、あるいは個人研究のパンフレット」などについて、「いくつかの資料名を書き付けたメモを」渡してくれる (pp.47-48)。大学図書館で「それを、一つ一つあたり、次の資料を請求するために、真夜子は閉架式資料室の受付に向かう。「六冊の雑誌を抱えて席にもどろうとした真夜子は、開架式の本棚から一抱えもの資料を運んでくる人影とぶつかった。両者の資料が、床にばらまかれた」(p.51)という状況で、殿村と知り合う。

◎殿村三味

郷土史研究家。「七十歳は超えていると見られる男性」で「遠誉野市に関する市政史」の資料を閲覧しようとしていた。「老人の顔に真夜子は、どこか見覚えがある気がした」が、数週間前に新聞の地方欄に投稿が掲載され、顔写真が添付されていたことを、記憶していた。卒論のために資料を集めていることを告げると「『文学部の学生が五十枚程度の論文が書けないようでは仕方がないと思っていたが、どうやらわたしの早合点であったようだ』」と言い、「図書館の一階のコーヒーラウンジで」、真夜子が卒論で扱う「樹来たか子」のことなどを話題にする (pp.51-53)。その際、偶然、図書館に居合わせ、その話を聞いていたのが、弓沢であった。

◎弓沢征吾

五年前に妻を亡くした、五十歳すぎの男性で子どもはない。癌の告知を受け、精神的に不安定な状態になっていた。「図書館で哲学と宗教の本を探して」(p.75)いたときに、ラウンジで真夜子と殿村が「樹来たか子」について話をしているのを聞くうち、興味が押さえられなくなって、その郷里である山口へ病状をおして向かう(pp.70-72)。「一九七二年、樹来たか子が自殺した年の地方新聞を調べるため」に、「山口市に到着した当日、その足で」「市立図書館」に向かい、「小さな記事はすぐに見つかり、弓沢はそれをコピーした」(p.83)。記事によって、生前住んでいた家の所在がわかり、その周辺を訪ねてみるが、病状が悪化して、倒れてしまう。

◎樹来静也

「樹来たか子」の息子である樹来静也は、「遠誉野市」内の、中学美術教師である。集団検診で異常が見つかり、手術うけたあと、大学医学部付属病院に通院している。記憶に障害を感じることがあり、「三月に退院して以来、樹来静也はたびたび図書館を訪れて」この市の歴史・現況について「調べ、確認してい」(pp.24-25)た。

真夜子は、偶然、自らが調べている「樹来たか子」の息子である樹来静弥が同じ市内に住んでいることを知り、その病状について「放射線学科に籍を置く友人に連絡を取った。そのうえで、こんな症状の病気が存在するのかどうかを尋ねる」と「ウェルニッケ脳症」ではないかという。「『医療関係者の間ではタブー視されている病気だから、あまりいいたくないのよね』と言いつる友人をなんとかなだめ、真夜子はウェルニッケ脳症についての知識を得た」(pp.337-338)となっており、この件に関しては、図書館で調べたり、職員に質問したりすることはない。

3-1-3. 「花の下にて春死なむ」『花の下にて春死なむ』³⁾

『花の下にて春死なむ』は、ビア・バー「香菜里屋」を舞台にした連作短編シリーズの最初の単行書である。「フリーのライターとなって二年」「大学を卒業し四年間勤めた出版社を辞めて、今の立場となった」(p.24)飯島七緒が、自由律俳句の同人として、親しくなっていた、片岡草魚が死亡した後、彼の日記に書かれていた四十年前の出来事について調べようと、草魚の故郷の山口県へ向かい、長府の町で市立図書館を訪ねる。「図書館は神社の裏手にある。大きなものではない。図館資料の保存よりは、地域住民への一般書

籍の貸出しを主とした目的としているようだ」という施設である。七緒は、「とりあえずは新聞を調べる」が「手元には探し求める事件の年月をはっきりと示す手掛かりはな」く、「一年分の新聞資料でさえ、量は膨大だ。どうひいき目に見ても、マイクロフィルムによる最新の保存システムがある図書館には見えない」(pp.34-35)と感じる。

新聞をみていると『長府の戦後史なら“港新聞”の現物をすべて保存してありますよ』図書館司書の中年女性が、にこやかに地方新聞の束を書庫から持ち出して「手を触れただけで、ボロボロと崩れそうな赤茶色の新聞の束を前に、七緒はフッと溜め息をついて「昭和二十四年と二十五年の二年分の港新聞を調べ、疲れ果てて図書館を出」(p.35)る。

七緒は、「大きな収穫を期待したわけではないが」司書の中年女性に、戦後まもなくの当地での出来事について尋ねると、長府の大火、といわれる大火事があったことが明らかになる。これは昭和二十二年のことで、港新聞はまだ再刊されていなかった。

「司書の婦人はいくつかの資料を調べ、県立図書館などに電話をかけて、中央新聞の地方支社から一枚のFAXを送ってもらい、七緒に手渡してくれ」る。七緒は、出火元の人物が草魚かもしれないと思ったが、その人物は「大火以降も長府市内に住んでいたことを、例の司書夫人が覚えてい」(pp.44-45)た。

市内の神社で、地方の名士たちの写真の中に、草魚と似た人物の写真を見つけ「翌朝、七緒は再び図書館を訪れた。すっかり顔見知りになった司書の婦人」に、写真の人について尋ねると、「魚住草太郎」という「代々長府藩の藩医をされた家柄」であるとこたえ、「地元の公共団体が発行した非売資料」の「分厚い『下関市医療事情抄』という書名」(pp.49-50)の本を七緒に提示する。それにより、写真の人物は草魚の父親で、家族構成や、長府大火の前後の出来事などについて知ることができた。

七緒は「資料を返却しながら、司書夫人に質問」(p.51)すると、その本に書かれていなかった、魚住家の「長女の綾さん」が存命であることを伝えられ、「図書館の司書婦人に教わった道を、七緒は曲がり角の数を数えながらたど」(p.52)り、その家を訪問する。

3-1-4. 「魚の交わり」『花の下にて春死なむ』

ある事件について調べるため、「七緒は、鎌倉市内の図書館に向かい、「閲覧テーブルで地元新聞の縮刷版を開くと、ごく自然に草魚のことが思い出され

る。彼が死んだのち、山口県の長府まで出掛けて、終戦直後の事件を調べたときのことである。やはりこうして古い新聞を、何日も探し続けた」が、それに比べると「日時ははっきりとしているのだから、調査は簡単だ」と感じる。「十一月の記事のページをめくり、十日の朝刊に」(pp.256-257) 関連の記事をみつける。

3-1-5. 「幻・風景」『孔雀狂想曲』⁴⁾

「趣味骨董・雅蘭堂」の「店主・越名集治」(pp.11-12) は、ある油絵を探すことを依頼される。現代では「忘れられた作家」Fの絵で、Fは「短い生涯に残した数点の絵画によって、美術史上に今も燦然と光り輝いている」が、その絵を探すための手がかりが、手書きの文のコピーで、「Fの先輩作家に当たる人物の当用日記に記されている文章の一部であり、「筆跡鑑定をクリアした真正物」だという。「この人物の日記は昭和四十年代に一度出版されており、国会図書館に行けば閲覧も可能である」(pp.191-192) ということで「国会図書館でFの先輩作家の日記を探し出し、閲覧の手続きを」(p.194) 取る。

3-1-6. 『暁英 贗説・鹿鳴館時代』⁵⁾

作家の津島好一は、進展しない書き下ろし長編小説の構想を考えるうち、鹿鳴館とその設計者であるといわれる、J・コンドルについて、調べようとする。

「鹿鳴館ほど有名な建物であれば、資料を検索するのはたいして困難なことではあるまい、というのが当時の目算」で「まず、日本建築学会の資料館を訪れた」が「鹿鳴館について、資料らしい資料がほとんど残っていない」ことがわかる。

津島は「司書の若い男に頼んで、鹿鳴館関連の書籍、研究書を出してもらって、そのあまりの少なさに驚く。研究書、評伝、学会で発表された講義のレジメなどがあったが、もっと専門的な資料がたくさんあると思っていた津島は、「『やはりここは現代建築の研究書が中心なのですね』」と言うと、「司書はいくぶんむっとした表情で、『ここ以上に建築関係の資料が揃っているところはありませんよ。学会で使われたレジメまで揃えてあるのは、うちだけです。国会図書館にだって揃ってはいないのですから』」(pp.8-9) と言いつ返される。「古い新聞記事の抜粋で」「鹿鳴館開館当時の、評判記」のようなものを差し出され、それをコピーし、「帰ろうとする津島に司書の若い男が、声をかけてき」(pp.11-13) で、鹿鳴館について資料があるとすれば、霞会館をあたってみてはどうかと言い、また、両国の江戸東京博物館には、写真を元に、

再現した模型があることを教える。津島は「丁寧に礼を述べ、またなにかわからないことがあったら訪ねてよいかと聞くと、司書の男は初めて笑顔を見せ、『中川です。月曜日と木曜日、金曜日はここにいます』そうやって差し出した名刺には『彩京大学建築学部建築史研究室』の肩書きがあった。『あの、失礼ですが』『大学院生です。ここはアルバイトなんですよ』」(p.15) という会話をしている。

3-1-7. その他の作品

○『狐毘』⁶⁾

「冬狐堂シリーズ」に登場する宇佐美陶子は、「美術大学の出身」「自分でも画家を目指して絵筆をとっていたという経歴の持ち主」(『狐闇』『解説』野間美由紀 pp.551-556) である。

この作品では、練馬署の刑事の四阿(あずまや)が、捜査の過程で過去の事件との関係を調べる際に「『国会図書館に行って、ついでに国会の議事録も読みました』」(p.275) と発言している。

○『鬼封会』『凶笑面 蓮丈那智フィールドファイル I』⁷⁾

「蓮丈那智フィールドファイル」は、東敬大学助教授の蓮丈那智と、助手の内藤三國・佐江由美子が活躍するシリーズである。

内藤・佐江の「二人は」、県立図書館の文書館に寄託されている「旧家の資料」を閲覧するため、「隣接する市にある県立図書館に出掛け」(p.26) する。

○『死満負』『触身仏 蓮丈那智フィールドファイル II』⁸⁾

「那智の要請を受けて、内藤は翌日から図書館に籠もりっきりとな」(p.141) する。

○『憑代忌』『写楽・考 蓮丈那智フィールドファイル III』⁹⁾

「佐江由美子は次回講義に使用する資料調べのためとあって、逃げるように図書館へと消えた」(p.17) という、大学図書館へ行くケースと、「地元の図書館に調べものに行く」として出ていった由美子」(p.37) が、後に「わたしは図書館で調べものをしていました。ほとんど利用者がいなかったから、司書の人が覚えていて思うのですけれど」(p.46) と言っている、地元の図書館を利用している例がある。

『蓮丈那智フィールドファイル』では、いずれも、大学教員：蓮丈那智の助手である、内藤、佐江が大学図書館や県立図書館などを利用しているが、利用内容の詳細については描かれていない。

3-2. 図書館員の対応が描かれている作品

3-2-1. 『冥府(アヌビス)の産声』

大学図書館の閲覧カウンターにいる「白髪混じりの小男」は、いつも「なにか書き物をして」おり、「分厚いレンズの奥に、木の実のような瞳があって、いつも人を上目遣いに見」(p.117)ている。医療ライターである相馬の依頼に対して、主体性のない対応をしているこの人物が、医学および科学関係誌に「『窓』という署名で裏情報を流している男」ではないかということが、暗にほめかされている。

3-2-2. 「花の下にて春死なむ」『花の下にて春死なむ』

ライターの飯島七緒が長府の戦後史について調べたということ、司書の女性は、地方新聞「港新聞」の現物を書庫から持ち出してくる。七緒は、「大きな収穫を期待したわけではない」が、戦後まもなくの大きな事件について聞かれた司書の夫人は、長府の大火、があったことを伝え、関連資料を他の機関から取り寄せて提供している。また、出火元の人物が大火以降も長府市内に住んでいたことを、記憶により回答(pp.44-45)している。七緒は、知人に似た顔の写真をみつけ、司書の婦人に、写真の人について尋ねると、当地で刊行された書籍を紹介(pp.49-50)される。さらに、本には書かれていなかったその家の関係者が、存命である事実を伝え、住所を七緒に教える(p.51)。

3-2-3. 『暁英 鷹説・鹿鳴館時代』

作家の津川は、日本建築学会の資料館で、鹿鳴館関連の資料や研究書を出してもらうが、あまりに少なく「司書が手間を惜しんだのかと思った」と感じている。そのあとも、「司書は舌足らずな話し方でいった」「司書はいくぶんむっとした表情」「明らかに、素人を嘲笑う表情が司書の頬に浮かんだ」「司書の若い男は、小首をかしげ、どこか意地の悪い目つきとなり」「高飛車な物言い」(pp.8-10)など、図書館の若い男の対応が、利用者である作家の津島に、よい印象を与えていない描写が連続して見られる。帰ろうとする津島にこの男が、声をかけて、鹿鳴館についてはかに資料があるとすれば、霞会館をあたってみてはどうか、と言い、また、両国の江戸東京博物館には鹿鳴館の模型があることを伝える。津島は「若い司書に抱いていた認識を少しだけ改め」「理系の人間にありがちな不遜さを備えてはいるものの、深く付き合ってみれば悪い人間ではないかもしれない」(pp.14-15)と感じる。提示された名刺により、この若い男は、建築を専攻する大学院生であることが明かされる。図書館の職員が、

積極的に、尋ねられた内容に関連のある情報を提供したことによって、利用するがわの印象が大きく変化していく様子が描かれている。

3-2-3. 「鬼封会」『凶笑面 蓮丈那智フィールドファイルⅠ』

助手の内藤は「県立図書館」に調査に出かけ、「図書館司書の対応は迅速であ」(p.26)る、と感じている。

3-2-4. 「双死神」『凶笑面 蓮丈那智フィールドファイルⅠ』

「県立の古文書館を訪れた内藤は、いくつかの資料の閲覧申請を出し、許可の下りるまでの時間を潰すべく開架資料室へとむか」(p.231)う。

3-3. 図書館に関する周辺事情が描かれている作品

3-3-1. 調べものをする人物と利用する手段

○『狐毘』

練馬署の刑事である四阿(あずまや)が「手帳を少し大きくした樹脂製の箱」のような「液晶画面とキーボードが並んでいる」電子情報処理の機械を「電子ペンで、画面をいくつか操作」し、「続いてキーボードを操作して、画面の中に文字を打出した」(pp.89-90)という場面がある。

○『緋友禅 旗師・冬狐堂』¹⁰⁾

宇佐美陶子は、知り合いが山口県で死んだことを聞かされ「コンピュータを操作し、ネット上の地方新聞のデータを取り出してみ」ると、その人物が「自殺を遂げたのは、三月前のこと」であり、「二時間ほどかけて地方新聞を丁寧にあたり、ようやくそれらしい事件を拾い上げた」「わずか数行というあまりに簡潔な記事の内容からは、発見された遺体が」その人物であるかどうかはわからない。「その後の紙面を数日分調べても、遺体の身元が判明したという記事はなかった」ので、翌日「萩の地元署に電話で確認」(p.11)している。

○『深遠のガランス』¹¹⁾

「銀座の花師」で「絵画修復師」でもある、佐月恭彦は、自分の仕事の関係で、通信状況が不良でインターネットが使えない場所に出向く。そこで「遠い過去にまで遡って、当地に発生した地震を調査することは不可能か、否か」「古くは日本書紀に地震災害の記述を見ることができるし、各地の風土記にも同様の表記がある。——それを細かく調べてゆけば。ただし、インターネットが自由に使えないこの場所では相当に難しい」(p.147)と考えているという設定になってい

る。

○「双死神」『凶笑面 蓮丈那智フィールドファイルⅠ』

助手の内藤は「時間の合間に情報端末機を使ってインターネットへのアクセスを試みた。検索エンジンを使い」「検索を試みたのだが、一件もヒットする情報がなかった」(p.230)という。

○「ランチタイムの小悪魔」『パンドラ's ボックス』¹²⁾

「糊点心情報サービス」という情報サービス会社には、リサーチ部門と情報配信部門があり、社員が「都内の書店と図書館で調べものをする」場面がある。また、新聞のバックナンバーを手に入れるため「築地にある新聞社を訪ね」(pp.221-233)ている。

○「不如意の人」『支那そば館の謎 裏京都ミステリー』¹³⁾

「京都でも屈指の貧乏山寺」の寺男、有馬次郎は、「数年前」まで「関西一帯を活動範囲にする別の稼業に従事」しており、それは「裏の稼業」で「広域窃盗犯だった」(p.12)。この人物が、ある本を探す際「京都中の本屋」をまわり、「大型書店のコンピュータで検索してもらい、作品が三年前の刊行であることまではすぐに突き止めることができた」が、文庫化はされておらず、「すでに版元も絶版にしており、『あとは古書店を探すか、インターネットのオークションをのぞいてみるか』という有様」だった。「かつての故買屋仲間に連絡を取ると、注文の品はほんの四時間ほどで手元に届けられた」(pp.192-193)という。

3-3-2. 公務員をめぐる事情

○『闇色のソプラノ』

十月が過ぎ「文学部の就職戦線はこの時期からが本番」で「教職、学芸員、図書館司書といった公職もしくはそれに準じる職業に就くものは別として、文学部では多くの学生がマスコミをめざす」が、日程は、「一般に比べて遅い」(p.112)ことが指摘されている。

○「鬼封会」『凶笑面 蓮丈那智フィールドファイルⅠ』

博物館の学芸員をめざしている学生からの手紙について「『いまどき学芸員の空きがあると思っているところに、浅はかさがみえる』」(p.23)と紹介される。

「公立施設の学芸員（美術館、博物館に勤務する専門職）は、公務員の特別職である場合が多い。しかもその定員はあまりに少なく、就職希望者は反比例して膨大であり、学芸員というポジションそのものを、土建事務方官僚の天下り先としてしか考えていない地

方自治体も少なくな」い。バブル景気の時には、民間の博物館、美術館がさかんに建設されたが、長くは続かず、「閉鎖寸前に追い込まれた館も数多」(p.24)い。

○「湖底祀」『写楽・考 蓮丈那智フィールドファイルⅢ』

バブル景気の時代、「小さな市町村にまで」「郷土資料館という名の資料収集機関が各地に建てられ」その「おかげで、霧散の運命から逃れることができた」資料もある。内藤は、「市役所に併設された郷土資料館に赴き、東敬大学の助手であることを告げると、すぐに学芸員が閉架式資料室に案内してくれた」が、「雑然とした有様」で「資料館を建設したものの」「施設の運営に苦しんで」(pp.149-150)おり、対応しているのも、専任学芸員ではなく、庶務課の課長と兼任で、学芸員資格も持っていない。

○『曉英 贗説・鹿鳴館時代』

鹿鳴館に関係する資料がありそうところとして紹介された、霞会館について、作家の津島は、「いうほどにはガードは堅くないだろうという、予想が」あり、「霞会館はある種の特殊法人か公益法人」だから、日本でも有数の出版社から依頼すれば、「露骨な取材拒否をすることはないだろうと思った」(p.16)という。

3-3-3. 図書館に関連のある状況

○『闇色のソプラノ』

「彩京大学の図書館は一般に公開されているために、利用者の中には一般社会人も多い。冬休みが近付くにつれ、受験生が閲覧室を占領しないよう、館内を見回る職員の姿がふえる。もっとも、大学側の言い分によれば、学部生の図書館の利用率が低すぎることも原因のひとつなのだそう。それが的外れでないことは、周囲をざっと見回してみればすぐにわかる。明らかに大学生の姿よりも、それ以外の利用者の方が多」(p.51)い。

○「家族写真」『花の下にて春死なむ』

地下鉄・赤坂見附駅の「改札口の片隅に、本棚が置いてあり、本は「市民の寄付によるもので、駅を通過する人々が自由に借りて行くことができる。貸し出しも自由、返却も自由というこの本棚は、基本的に善意によって成り立って」いるが、そこにあった文庫本から「一枚の写真がこぼれ落ち」る。それは「家族写真」であり、この写真が事件の発端となる (pp.80-81)。

○『孔雀狂想曲』

国会図書館は「全国で出版されるすべての書籍の収蔵を義務づけられているだけあって、この図書館の利用者は多い。卒業論文の締め切りでも近づいているのか、学生らしい男女の姿が目立った」(p.194)「持つ札の番号が掲示板に表示され、請求した書籍をカウンターで受け取った。例のコピーを取り出し、一字一句確認したが、書籍の本文とコピーは完全に一致していた」(p.195)のように、国会図書館での情景が実情に近い形で、ていねいに描写されている。

○「鬼封会」『凶笑面 蓮丈那智フィールドファイル I』

調査の時には、肩書きがものをいい、「一枚の名刺で態度を簡単に翻す図書館職員」が存在していることに、助手の内藤は、「遣り切れないものを感じるが、最近、ようやくそれも仕方がないと思えるようになった」(p.26)という。

○「双死神」『凶笑面 蓮丈那智フィールドファイル I』

「県立の古文書館」では「一般の蔵書資料と違い、古い時代の資料の現物閲覧はときに責任者の決裁を必要とする。それも大学職員であることを証明するものがあればこそで、一般人にはほとんど公開されることはない」(p.231)という。

○「死満復」『触身仏 蓮丈那智フィールドファイル II』

「東敬大学の図書館は、一般学生用の閉架式図書館とは別に、研究者のみが利用できる、開架式の資料室が併設されている。そこには、各学部に関係する研究資料、特に他大学の研究機関が発表した資料が、数多く収蔵されている」(p.141)という。

○『曉英 贗説・鹿鳴館時代』

「日本建築学会の資料館」は「一般には公開されているものの、ここは予約を要する」ので、作家の津島は、「電話を掛け、鹿鳴館について調べたいという趣旨を述べ」る。「日本建築学会の資料館は、もともと研究者や専門の学生が利用することを目的に作られていて、予備知識のない津島が利用するには、いささか不便な作りになっている。目録カードの分類も、他の図書館とは整理方法が違うのか、よくわからない」(pp.8-9)と、津島は感じる。

4. ライター出身作家が描く図書館

自らも豊富な調査体験をもとに、事実裏付けられ

た作品を多数発表してきた北森鴻の作品には、図書館で調べ物をするシーンが含まれている¹⁾。国会図書館で調べているケースには、『狐毘』(警察関係者が国会の議事録を調べる)、『孔雀狂想曲』(骨董店主が刊行年の古い資料を閲覧する)があり、後者では国会図書館の書庫出納システムが紹介されている。公共図書館については、山口、下関、鎌倉、といった実際の地名が使われているが、特に実在の図書館をはっきりとしたモデルとしていることが強く感じられるような記述にはなっていない。図書館での調べ物といっても、過去の記録について、新聞の原紙や縮刷版を調べる程度であるが、なかには司書が利用者の質問に対応したり、他の図書館へ問い合わせをしているケース(「花の下にて春死なむ」)も含まれている。大学図書館では、学生が卒論作成のために利用したり、学外の利用者にも開放されていて、「市政史」「哲学や宗教」などの資料を求めて利用している様子が描かれている(『闇色のソプラノ』)。大学の助手が授業準備や資料集めのために利用している(『蓮丈那智フィールドファイル』シリーズ)例もある。

図書館員については、大学図書館の職員のカウンターでの様子や利用者である医療ライターの相馬への対応が描かれているが、図書館業務の専門家というより、むしろ情報ブローカーのような扱われ方(『冥府(アヌビス)の産声』)である。公共図書館では、山口県下関市長府の図書館の「図書館司書の中年女性」「司書の婦人」などと表記される人物が、利用者であるライターの女性(飯島七緒)の調査質問に対して、地方新聞のバックナンバーを提示したり、その図書館にない資料については、県立図書館などに問い合わせ、求められた質問に対する回答に関する情報を提供しようとしている。一方で、この図書館員は、善意での行動という印象はあるが、当人の記憶で質問に回答したり、現存の人物の住所を本人の断りなく公開してしまっているように受け取れる記述がある(「花の下にて春死なむ」)。また、「日本建築学会の資料館」という(建築の)専門図書館で、利用者に対応しているのは、アルバイトの大学院生である。この若い男に対して、作家の津島は、「手間を惜しんだのか」「舌足らずな話し方」「いくぶんむっとした表情」「明らかに、素人を嘲笑う表情」「どこか意地の悪い目つき」「高飛車な物言い」など、必ずしもいい印象を持たなかったが、自らの調査事項である「鹿鳴館」に関して、必要な情報の入手につながるヒントを提示されると「認識を少しだけ改め」「理系の人間にありがちな

不遜さを備えてはいるものの、深く付き合ってみれば悪い人間ではないかもしれない」と感じている（『暁英 賈説・鹿鳴館時代』）。ただ、これは、作家の津島が、図書館員の専門性を評価した、というよりは、むしろ、情報の提供にくわえて、名刺を提示されたことにより理系の専門家である「建築を専攻する大学院生」という属性を認識したことにより印象が変化した、という描かれ方になっている。

後期の作品では、地方新聞を調べたり（『緋友禅』）、出版情報を入手する（『支那そば館の謎』）など、インターネットを、情報入手のための手段として活用している。ネットがつながりにくい地域があることが示されたり（『深遠のガランス』）、検索してもヒットしないケース（『凶笑面』）もある。本を探すシーンでは、書店で検索して絶版だとわかると、古書店かネットオークションで、という展開になって、図書館は絶版書籍の入手先として、想定されていない（『支那そば館の謎』）。「ウェルニッケ脳症」という病気に関しては、友人に連絡を取って尋ねているシーンがあり、図書館で調べたり、図書館司書に質問したりはしていない（『闇色のソプラノ』）。

大学図書館のシステム（『触身仏 蓮丈那智フィールドファイルⅡ』）、大学図書館の地域開放（『闇色のソプラノ』）、国会図書館の利用手続き（『触身仏 蓮丈那智フィールドファイルⅡ』）、専門図書館のカウンター職員（『暁英 賈説・鹿鳴館時代』）、公共施設や公務員をめぐる実情（『凶笑面 蓮丈那智フィールドファイルⅠ』、『写楽・考 蓮丈那智フィールドファイルⅢ』）などについては、一定の知識をもとに、実態をふまえた具体的な記述がみられる。

自らはライター時代も、作家としても、相当程度の調査体験があり、それを仕事にも作品にも反映させていたと思われる北森だが、作品の中で描かれる図書館や図書館員には、ある程度の存在感があり、情報提供機関として機能している。一方、利用している資料は、新聞の原紙や縮刷版などであり、後期の作品では、地方紙のバックナンバーや出版情報をインターネットで入手しているケースも描かれている。図書館員が質問に対応している例もあるが、病気については、友人を登場させる（『闇色のソプラノ』）など、図書館が提供している情報の内容に限界も感じられるストーリーになっている。

5. おわりに

根本祐二は、東日本大震災で、公共的なインフラが被災したことを指摘し、「社会資本を建設したり補修したりすることは、国や自治体の仕事であり、公共投資と呼ばれていて、それらを「使い続けるためには建て替えたり、作り直したりしなければならない」（p.1）と主張する一方、自らの講演会で、「公立図書館を1回利用する際にいくらかかっているのかを問う一般的なアンケート」を実施しており、「1回に4,5冊借り出すことが通常であるため、貸出件数あたりではなく貸出者数あたりで算出」して、「『貸出者1人あたりいくらまでならば公立図書館として保有することを認めるか』という質問」を講演会の参加者に尋ねたという。「今までの平均は200～300円」で、「これが一般的な市民感覚」とする一方で、全国の公立図書館の「平均はおおむね1000円である。貸出者1人に対して総費用1000円をかけている」ことが示され、自治体職員なら、図書館は必要なのか、もっと安くする方法はないのか、民間委託・指定管理・PFIは使えないか、などの方法を考え始めるだろうと指摘している。「費用には、図書購入費、施設設備費、維持費、人件費、光熱水道費などすべての費用が含まれている」（pp.181-183）とあることからみて、ここでの算出方法は、図書館の総費用を貸出冊数で割ったものであり、図書館が提供しているほかのサービスは、まったく考慮の対象からは、はずされていたと思われる。

「図書館＝資料の貸出施設」とみられているということであり、貸出サービスに図書館サービスのすべてを集約して評価しようとしていることになる。こうした評価そのものの妥当性はさておき、これは「図書館サービス＝貸出サービス」という見方をしても、講演の聴衆である人たちに違和感なく受け入れられるであろうと、話し手が考えているということである。そうした見方が自治体の財政最適化に関する著作の中で示され、その考えに基づく活動が提案・実施されていることになる¹⁾。

最近、『雑司ヶ谷 R. I. P.』の作者による貸出猶予問題について扱った『図書館雑誌』の「投稿欄（北から南から）」に、「図書館が担うべき公共性とは、貸出による資料提供だけでなく」「多様な側面があるはず」という見解が掲載されたが、そのことを社会的に定着させてゆくためには、なお大きな課題が存在していると考えなければならない²⁾。

多数のエッセイの著作もあり御茶ノ水女子大学学長をつとめた、土屋賢二は、「だれからも必要とされない存在」というタイトルで、『文藝春秋』巻頭に掲載されたエッセイの中で、「長い刑期を終えたようだ。この三月で三十五年間勤めた大学を定年退職した」が、「図書館に通うことだけは避けたい。近所の図書館は、新聞や雑誌を読んでいる中高年の男でいっぱい。その光景には華やかさも活気もない」という。年金の通知がきて、思ったよりはるかに額が少ないと驚き「金がかからず、長時間、時間をつぶせるころを考えると、いくら考えても図書館ぐらいしか思いつかなかった」と述べている³⁾。

図書館機能の多様性について、図書館関係者のがわから、さらに多彩なアピールが必要であるといえよう。

注

ある著作が複数の刊行形態で出されている場合、ページは、最新ののものによって示した。文庫化されているものは、文庫版のページである。

1. はじめに

1) 視聴率は13.2% (ビデオリサーチ関東)。

放映の翌日(8月27日)、仁上幸治・帝京大学准教授は、「図書館サービス計画研究所(tosaken)」の掲示板に、この番組について「どうなんでしょ、この図書館員の描き方は?」という投稿をしている。

2) <http://www.fujitv.co.jp/fujitv/news/pub-2011/110812-i040.html>

3) 森村誠一『破婚の条件』幻冬舎文庫、2002.4←幻冬舎ノベルス、2001.3←幻冬舎、1999.10

文庫版解説によると、『ボンツーン』1998年10月号から99年4月号まで連載、1999年10月幻冬舎より刊行(p.310)とある。

4) 中西に、トーマス・マンの『トニオ・グレーゲル』みたいだといわれ、ヒロインと中西との間で会話もりあがる。

5) 撮影には、福生市立中央図書館で行われたことが、紹介されている。

<http://hussafilm.com/results/2011/08/22/163/>

6) 大野由美子による、文庫版解説では、「チャームプロデューサーとして働く里見昌枝は相応の収入を得ており、夫の慎治もまた雑誌社の契約ライターとしてかなりの収入を得ている」(p.310)となっている。

ドラマでは、夫の収入も低下していたことになっている(ヒロインが捜査員に話したことば)。

7) ドラマでは、図書館に所蔵されているミステリ小説を手にとって読み、それを参考に夫の殺害計画を日記に書いているシーンがあった。

8) 資格の社会的な認識について、たとえば『資格図鑑』(ダイヤモンド社)は、各種の資格について「きれいご

とは一切抜き!」(『資格図鑑 2003』ダイヤモンド社、p.3)にとりあげて紹介し、2003年に刊行されて以来、年刊としてすでに10年以上にわたって刊行されてきている。その最新刊である、『資格図鑑 2012』ダイヤモンド社、では、「資格を『厳選』」「資格を取ってから」を詳述」「『広告なし』で制作」(pp.4-5)といった編集方針のもと、47の資格について「ちかごろ話題の資格」「ビジネス&マネー系資格」「法律系資格」「不動産&建築系資格」「IT系資格」「医療系資格」「福祉系資格」「動物&自然系資格」「その他の資格」などに分け、「取得エネルギー」「就職可能性」「一般的年収」をそれぞれ数ページずつ論じている。「看護師」「臨床心理士」「保育士」などは、こちらで扱われているが、「図書館司書」は、本文・目次にはない。かろうじて巻末の「シンデレラ資格の通信簿」という部分で、1/3ページで「資格試験はなく、大学で規定単位を修得するのが一般的」「正規職員の募集が少なく、非常勤で働く人も多い」(p.380)などと紹介されている。

2. ライター出身作家：北森鴻

1) 「解説・杉江松恋」p.391 北森鴻『冥府(アヌビス)の産声』光文社文庫・新装版、2008.11

2) 著者の逝去により、未完の作品として刊行された『暁英 贋説・鹿鳴館』(文庫)巻末に掲載されている「北森鴻作品リスト」には、単著の単行書：33点があげられている。その中で、共通のキャラクターによるシリーズとして、「旗師・冬狐堂 宇佐美陶子シリーズ」4点、「香奈里屋シリーズ」4点、「蓮杖那智フィールドファイル・シリーズ」4点、「鴨志田鉄樹&根岸球太シリーズ」2点、「裏京都ミステリー・シリーズ」2点、「絵画修復師・佐月恭彦シリーズ」2点、「雅蘭堂・越名集二シリーズ」1点、『狐閣』は、「旗師・冬狐堂 宇佐美陶子シリーズ」「蓮杖那智フィールドファイル・シリーズ」の双方にカウント)があげられている。

シリーズ以外の作品は、15点で、時代的に現代を舞台としない、時代小説的なものが、『狂乱廿四孝』『蜻蛉始末』『暁の密使』『なぜ絵版師に頼まなかったのか 明治異国助人奔る(おたすけガイジンはしる)!』『暁英 贋説・鹿鳴館』の5点ある。

出典は、北森鴻著作リスト『暁英 贋説・鹿鳴館』徳間書店(文庫)、2011、pp.578-581

3) 北森鴻『バンドラ's ボックス』光文社文庫、2007.10 ←カッパ・ノベルス(光文社)、2000.6

同書については、北森自身が「虚実入り混じったエッセイ&短編集」「作品が書かれた当時のことを思い出しつつ、少し長めのライナーノートをつける」(p.7)という表現をしている。

4) 解説・杉江松恋 pp.388-396

北森鴻『冥府(アヌビス)の産声』光文社文庫・新装版、2008.11←光文社文庫、2000.5←カッパ・ノベルス(光文社)、1997.4

5) 杉江松恋「初刊本解説」pp.557-569

北森鴻『暁英 贋説・鹿鳴館時代』徳間書店(文庫)、2011.3←徳間書店、2010.4

- 6) 解説 千街晶之 (ミステリ評論家)
北森鴻『なぜ絵版師に頼まなかったのか』光文社文庫, 2010. 10, pp.280-289
- 7) 「鮎川哲也賞受賞者に聞く 北森鴻 聞き手: 近藤史恵 ちょっと退屈かな, もう一人殺そうかな, と」『創元推理 10号』1995年秋号, pp.20-24
3. 北森鴻作品と図書館
- 1) 北森鴻『冥府 (アヌビス) の産声』光文社文庫・新装版
なお, この巻末には「参考資料一覧」として, 10 数点の医学関連書籍 (p.380) があげられている。
- 2) 北森鴻『闇色のソプラノ』文春文庫, 2002. 10←立風書房, 1998. 9
解説では, 「本書にはいくつもの偶然が登場する」「数多くの偶然と必然が」「決してご都合主義のものではない」「作者としては〈偶然〉の多用に忸怩たるものがあったのであろうか」「遠誉野市という」「特異な都市を」(pp.441-442) つくりあげた, とされている。「解説 西上心太」pp.436-444
- 3) 北森鴻「花の下にて春死なむ」『花の下にて春死なむ』講談社文庫, 2001. 12←講談社, 1998. 11
北森鴻は, 単行書『花の下にて春死なむ』講談社, 1998. 11 で, 「第 52 回日本推理作家協会賞・短編および連作短編集部門」を受賞している。
この作品の末尾には, 「史実として長府大火があった事以外, すべて作者のフィクションです」(p.69) という記述がある。
- 4) 北森鴻『幻・風景』孔雀狂想曲 集英社文庫, 2005. 1←集英社, 2001. 10
- 5) 北森鴻『暁英 贋説・鹿鳴館時代』徳間書店 (文庫), 2011. 3
杉江松恋「初刊本解説」が, 文庫にも再録 (pp.557-569) されているが, そこでは, 「北森鴻にとっては, 『暁英 贋説・鹿鳴館』こそがその運命の一作だった」(p.557) 「完成すれば, 作者の代表作と呼ばれることになっていたはずだ」(p.563) 「惜しくも北森鴻は, 本書の完成を待たず二〇一〇年一月二五日に不帰の人となってしまった」(p.564) と述べられている。
- 6) 北森鴻『狐罨』講談社文庫, 2000. 5←講談社, 1997. 5
- 7) 北森鴻『凶笑面 蓮丈那智フィールドファイル I』新潮文庫, 2003. 2←新潮社, 2000. 5
- 8) 北森鴻『触身伝 蓮丈那智フィールドファイル II』新潮文庫, 2005. 8←新潮社, 2002. 8
- 9) 北森鴻『写楽・考 蓮丈那智フィールドファイル III』新潮文庫, 2008. 2←新潮社, 2005. 8
- 10) 北森鴻『緋友禅 旗師・冬狐堂』文春文庫, 2006. 1←文藝春秋, 2003. 1
- 11) 北森鴻『深遠のガランス』文春文庫, 2009. 3←文藝春秋, 2006. 3
- 12) 北森鴻「ランチタイムの小悪魔」『パンドラ's ボックス』光文社文庫, 2007. 10
- 13) 北森鴻「不如意の人」『支那そば館の謎 裏京都ミス

テリー』光文社文庫, 2006. 7←光文社, 2003. 7

4. ライター出身作家が描く図書館

- 1) 先にも指摘したとおり, 医学の世界を扱った『冥府 (アヌビス) の産声』(文庫) の解説で, 杉江松恋は, 北森が医学部出身者ではなく「取材の力だけで」書いたもの (p.391) であり, また, 杉江は, 『暁英 贋説・鹿鳴館時代』「初刊本解説」で「背後に膨大な取材量があることをうかがわせるのだが, 決してそれをひけらかさない」(p.567) と述べている。

北森鴻自身も, 鮎川哲也賞受賞作の『狂乱二十四孝』の執筆に際して, 「松竹大谷図書館や, 国立劇場のビデオライブラリーを利用」(p.21) したと述べている。

出典は, 次のとおり。

北森鴻『冥府 (アヌビス) の産声』光文社文庫・新装版, 2008. 11

北森鴻『暁英 贋説・鹿鳴館時代』pp.557-569

「鮎川哲也賞受賞者に聞く 北森鴻 聞き手: 近藤史恵 ちょっと退屈かな, もう一人殺そうかな, と」『創元推理 10号』1995年秋号, pp.20-24

5. おわりに

- 1) 根本祐二『朽ちるインフラ 忍び寄るもうひとつの危機』日本経済新聞出版社, 2011. 5

『図書館経営論』のテキストでも, 「還元額」として, 「(年間図書貸出冊数×平均単価) - 図書館費総額 ÷ 人口または世帯数」で割った金額を, 図書館の評価指標のひとつとして紹介しているものがある。

人口ひとりあたり, あるいは一世帯あたり, 図書館サービスによって, どの程度の額が, 還元されたか, をアピールする数値であるが, これはあくまで, 図書館の貸出サービスの部分のみをとりあげたものである。

出典は, 次のとおり。

竹内紀吉『図書館経営論 新現代図書館学講座 3』東京書籍, 1998, pp.12-13

なお, 図書館のコスト分析に関しては, 職員がどのような活動に従事したのかを記録し, それから各サービス一件あたりのコストを算出した分析も発表されたことがある。

「人件費や維持管理費, 図書費や施設設備の減価償却費といった費用を, 図書の貸出, 予約受付, 返却督促, レファレンスなどの業務 (活動) ごとに, 職員がそれぞれの活動に従事した時間を基礎に割り振る。そして, その金額をそれぞれ, 貸出冊数, 予約件数, 督促件数などで割ると一件当たりの原価が算出される」という「ABC 分析 (Activity Based Costing 活動基準原価計算)」では, 「本を一冊借りる」コストは, 176 円と算出されている。

出典は, 次のとおり。

南学「サービス原価から考える公共サービスのあり方 ABC 手法からサービス目標を検討する」『地方自治職員研修』2000. 11, pp.26-28

なお, 図書館における ABC 分析に関しては, 上記以外にも

南学「図書館の ABC 分析」『図書館の学校』no.50, 2004, pp.2-6

などの著作をはじめ、南学が、このテーマで多くの講演を行っている。

また、多様な観点から、幅広く、図書館評価を考える指標として「図書館パフォーマンス指標」[LibQUAL]があり、日本では、主に大学図書館など、学術情報を提供している施設に適用されている例が報告されている。

- 2) 加藤和英 (岐阜県図書館) 「(北から南から) 樋口毅宏著『雑司が谷 R. I. P.』問題」が問いかけるもの：貸出の公共性とはなにか『図書館雑誌』Vol.105, No.9 (2011. 9), pp.646-647

樋口毅宏著『雑司が谷 R. I. P.』に掲載された、貸出猶予を求める文章について扱った論考の代表的なものとして、以下のものがある。

根本彰「図書館での貸出し猶予の意味」『出版ニュース』2011.4 月中旬, pp.6-13

根本彰「図書館と出版の新しい関係 田井郁久雄氏

への返答も兼ねて」『出版ニュース』2011, 8 月上旬, pp.12-16

田井郁久雄「『貸出猶予のお願い』と図書館の自己規制, および根本彰氏の主張への反論」『みんなの図書館』NO.413, 2011. 9, pp.10-29

田井郁久雄「根本彰氏の『返答も兼ねて』(『出版ニュース』8 月上旬号) を読んで」『みんなの図書館』NO.414, 2011. 10, pp.51-54

根本彰は、最近の下記の著作でも、「公共図書館のサービス戦略のあり方」(p. iii) について、持論を展開している。

根本彰『理想の図書館とは何か 知の公共性をめぐって』ミネルヴァ書房, 2011. 10

- 3) 土屋賢二「だれからも必要とされない存在」『文藝春秋』2010. 5, pp.83-84

(本文中で参照した web ページは、2011 年 10 月末の時点で、公開されていた内容です)